

2015年度 サギタリウス・チャレンジ(チャレンジ部門)
企画実施報告書

タイトル	被災地・未災地 学生交流会	
実施日	2015年8月17日(月)～2015年8月21日(金)	
代表者	学生証番号	氏名
	301925	久保力也
企画概要	<p>東日本大震災を経験した学生と、災害体験のない(未災地)学生が交流する場を提供しました。企画の背景には、被災地の学生が被災体験を語るができないという空気感があつたことです。そこで、聞き手となることができる未災地の学生との交流を通し、災害に対し、語ることでできる場、ともに考えることでできる場を提供しました。</p>	
活動状況	<p>8月中旬に、交流会を実施し、事後研修会を10月に実施しました。交流会では、関西(未災地)から約30名の参加があり、東北(被災地)から約10名の参加がありました。開催場所は、被災地でもある、宮城県松島で行いました。交流会の中では、被災体験の共有や、今後の災害について考える時間や、スポーツ、郷土料理など様々なプログラムを実施しました。</p> <p>プログラムの内容は以下のとおりです。</p> <p>一日目 アイスブレイク 講演(弁護士による法律と災害) ワークショップ 講演(被災した姉妹での語り)</p> <p>二日目 昨日のフィードバック スポーツ大会 ワークショップ(理想のまち作り) 語らい</p> <p>三日目 フィードバック まとめ 決意表明</p> <p>学生同士の語り合いの中には、災害のリアルな部分が多くありました。一部紹介をすると、家族や友人を失った時の状況や感情などを語った被災地の学生がいました。また、行方不明の家族を探すため、沿岸に行き、探している途中に多くのご遺体を泥の中から引き上げたという話もありました。その話をしたのは震災当時中学2年で現在大学1年生の学生でした。参加学生のほとんどが大学生でしたので、同世代の学生がそのような経験をしたことに驚きを隠せないでいたように思いました。考えてみれば、ご遺体の状況が、普通のお葬式で見るような状態ではないことや、同世代にも、家族をはじめ、大切な人を失った人がいることは分かります。しかし、身近に感じたことがない学生がほとんどです。同世代の体験だからこそ、自分事に落とし込み聞くことができたのではないかと思います。</p>	

	<p>その後、事後研修会を開催しました。関西（未災地）の学生を対象とし、交流会中に考えたことを改めて考えなおす機会を作りました。交流会後も、考え続け、行動に移している参加者が多かったです。しかし、日常の生活に戻り、周りの人との温度差や、相手に伝えられないもどかしさを抱えている参加者もいました。このままでは、交流会で感じたこと考えたことが、無駄になりそうという意見もありました。そうならないために、どうすべきなのか、何を考えるべきなのかについて、考えあい・語り合いました。その結果もあってか、自ら、まわりの知人や家族を招待し、報告会やワークショップの場を作ることや、文化祭などでブース出展をした参加者もいました。交流会という非日常で、同じ志を持ったメンバーで集まっているときに、意識が高まることは、ごく普通のことです。しかしそれを持続することが難しく、一番重要なことだと考えています。何事も、根付かせるまで寄り添うことが重要であると改めて気づかされました。</p>
<p>考 察</p>	<p>交流会実施の背景にある、被災体験を語るができない。語りたい。という東北（被災地）の想いの実現ができたように思います。そして、関西（未災地）の学生が、災害について考えること、寄り添うことができたようにも思います。さらに、ただ、話を聞いた、思ったことを話し合っただけでなく、確実に、災害を自分事と捉え、各自が今、自分にできることをしています。その点から考えても、交流会は成功ではないかと考えています。</p>
<p>所 感</p>	<p>2年連続での採択を頂き、感謝しております。昨年に引き続き開催できたことは、大きな意味を持っていると考えます。1つは、継続的に東日本大震災について、誰かが目を向けているという東北に向けてのメッセージ性です。2つ目は、小さな力ではありますが、交流会の存在が、学生の防災意識の向上に寄与することができている、日常での学習や生活にいい刺激を与えたことです。そのような機会を提供できたことはうれしく思います。関係者の皆様に本当に感謝しております。</p>